

# 特集 情報化の進展 と 文教施策

- 巻頭言  
高度情報通信社会と人間——猪瀬博
- 座談会  
教育の情報化と現況と課題  
——出席者 石井威望/荻宿俊文/野中ともよ  
深山 照/司 小口浩一
- 提言  
文教分野における情報活用の将来像  
坂元 昂/吉田 敦/大鋸 順
- エッセイ  
山根一眞
- 事例紹介  
岐阜県板取中学校ほか
- 人・この道  
山口久美子
- 教育・文化と地域づくり  
山梨県牧丘町
- 都道府県発  
教育・学術・文化ニュース  
青森県・岐阜県・鳥取県・愛媛県

# 文化財 紹介



重要文化財

## 道後温泉本館

(愛媛県松山市道後湯之町五番六号、松山市所有)

夏目漱石の小説「坊っちゃん」にも紹介されている道後温泉本館は、現在も多くの市民や観光客に利用されている。建物は神の湯本館、又新殿・霊の湯棟、南棟、玄関棟、事務棟からなり、様々な屋根を組み合わせた変化に富んだ外観が特徴である。内部は浴室・脱衣室や広い休憩室等からなり、神の湯が一般用の浴場、霊の湯が上級の浴場で、又新殿には皇室用の浴室が設けられている。神の湯、霊の湯はだれでも入浴でき、又新殿も通常は一般公開されている。

現在の姿、構成は、明治から昭和にかけて出来上がったもので、神の湯本館が明治二七年、又新殿・霊の湯棟が明治三二年、南棟と玄関棟が大正二三年、事務棟が昭和一〇年の竣工である。その経緯は、温泉の繁栄とともに規模を随時拡大していった様子をよく示している。ちなみに、漱石が見た建物は最も古い神の湯本館ということになる。

近代の建造物の保護には、守るという考えただけではなく上手に活用していくという考え方が必要不可欠である。多くの人々が利用し親んでいる道後温泉本館のいわば「町の顔」といふべき姿は、これからの文化財保護の在り方に一つの示唆を与えてくれているのではないだろうか。

文化庁文化財保護部建造物課  
文部技官 後藤 治

▽今月号の特集のテーマは、特定のテーマに絞らず、平成七年度の文教施策全体を展望する「文教施策の進展」としてあります。

今日の文教施策の概観に資することができれば幸いです。

▽新年度を迎えた今月号から、本誌の企画の一部を変更しております。

新しい企画としては、「いきいき個性 ある日の学校訪問記」、「天然記念物歳時記(いずれもカラーグラフィック)や「文学のふるさと」があります。また、一部変更したものは、国立大学附置研究所等の紹介を含めて一頁の増を図った「科学はいま」、毎号四県ずつ御登場をいただき一年で全都道府県のニュースをタイムリーに発信できるようにした「都道府県発」教育・学術・文化ニュース」があります。

さらに、「名作シリーズ」には、京都国立博物館に代わり奈良国立博物館に御登場いただき、同館所蔵の名作の数々を一年間にわたって御紹介していただくこととしております。

▽一歳歳年人同じからず——四月は、学校や教育委員会、また社会一般でも去る人あり、来る人ありであります。この時期には、子供たちの世界でも、クラス替えや転校などを控え、子供たちなりに期待や不安を抱くこととなります。

様々な出会いや経験が子供たちにとつても、すばらしい人生の糧になることを願っています。

(A・S)

### 投稿歓迎

- 読者からの「たより」欄への投稿を歓迎します。本誌を読んだの御感想、御意見等をどしどしお寄せください。
- 投稿規定  
①一件につき四〇〇字以内 ②住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記(誌上匿名可) ③掲載分には薄謝進呈  
※文章を一部手直しさせていただくことがあります。
- 送り先  
〒100東京都千代田区霞が関三二二二  
文部省大臣官房政策課 「文部時報」編集部

MESC 61 月刊

文部時報 4月号

第1420号

- 著作権所有——文部省◎
- 発行所——株式会社 きょうせい  
本社 〒104 東京都中央区銀座7丁目4番12号  
本部 〒167 東京都杉並区荻窪4-30-16  
電話 03-5349-6666(営業部) 振替口座 00190-0-161
- 印刷所——株式会社行政学舎印刷所

平成7年4月10日印刷  
平成7年4月10日発行

定価550円(本体534円)(〒84円)  
年間購読料6,600円

ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます。  
なお、購読のお申し込みは直接営業所またはほとりの書店にてお願いいたします。

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、それぞれ筆者個人の見解であることをお断りいたします。

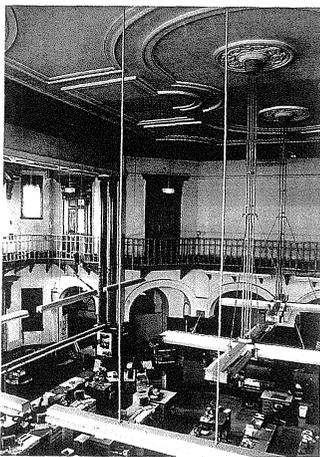
Printed in Japan 1995 ISSN 0916-9830 ●この刊行物は再生紙を使用しています。

重要文化財

# 岩手銀行旧本店本館 (盛岡市)



明治44年竣工  
煉瓦造、建築面積693㎡、2階建、銅板葺  
平成6年12月27日指定  
所有者 株式会社岩手銀行



営業室

岩手銀行旧本店本館は、盛岡市街地の中津川に沿った交差点に位置する。塔やドームを要所に配し赤煉瓦に花崗岩を帯状に回す外観の意匠に特徴があり、その立地条件の良さと華やかな意匠から盛岡市のシンボリックな存在となっている。また、現在も営業用店舗(岩手銀行中ノ橋支店)として利用されているため、窓口営業時間にはだれでも内部に入り、外観と同様に華やかで優れた意匠をもつ吹き抜けの営業室等の内装を目にすることができる。このため、この建物では日常的な銀行としての利用が、いわば「文化財の公開」に貢献しているといえる。

文化財建造物については、単に文化財として展示公開するよりむしろ、建造物本来の機能で利用(活用)し続けることによって、かえって保存に対する一般の広い理解や協力を得ることが出来る。この建物はそれを示す好例である。特に近代の文化財建造物は、企業が所有し多種多様な目的で現在も利用し続けているものが多い。このため、このような企業による保存活用事例を増やすことが、今後の文化財建造物保護の大きな課題のひとつである。この建物は、ロビーの一部を「市民ギャラリー」として広く開放しており、企業による地域文化貢献という点でも注目すべき事例となっている。

(文化庁文化財保護部建造物課文化財調査官 後藤 浩)

## 特集 ● 青少年の 学校外活動

●巻頭言  
今、なぜ学校外活動か——坂本昇一  
●座談会  
これからの学校外活動  
(出席者 明石要一/小久保茂昭/坂本忠雄/松下俱子/司会 金森越哉)

●論文  
青少年と冒険キャンプ——飯田 稔  
●エッセイ——C・W・ニコル  
●事例紹介——国立大隅少年自然の家ほか  
●特別記事  
教職員の生涯生活設計の推進

人・この道——吉田義太郎  
教育・文化と地域づくり——石川県門前町  
都道府県発——教育・学術・文化ニュース  
福島県・福井県・岡山県・香川県

▽今月号の特集テーマは、「スポーツの振興と地域づくり」です。国民皆スポーツ時代といわれる今日ですが、スポーツが地域づくりに果たしている現状と課題を取り上げ、実践例も紹介しています。▽「エッセイ」は、元マラソン選手の宮原美佐子さんに御執筆いただき、走ることの楽しさや楽しさ、そして宗コーチとの出会いなどマラソン人生を御紹介いただきました。普通のOJからオリンピック代表にまでなられたということには驚かされました。あるレースでトップを走る宮原選手と歩道と伴走する宗コーチの姿が師弟愛としてテレビで紹介されたことをおぼえている方も多いと思います。▽「人・この道」では、文部大臣表彰を受けた元プロ野球選手の杉下茂さんを御紹介いたしました。フォークボールの大投手としてあまりにも有名な杉下さんですが、フォークボール誕生のたいへんな御苦労が伝わってきます。また、杉下さんが認める、今のプロ

野球界で本当のフォークボールを投げられるのは、今をときめくドジャースの野茂投手と横浜ベイスターズの佐々木投手の二人だけだそう。来シーズンプロ野球の観戦に興味が一ツ増えました。▽今月号のテーマはかけ離れた。▽子供のころの田舎の運動会を思い出しました。子供からお年寄まで参加し、みんなが楽しみました。転んでばかりでなかなかゴールできない、「二人三脚競走」指定された物を観客席から借りてゴールする「借物競走(?)」、借り物の中には、赤ちゃんや美人があつたりして、大泣きされたり、なかなか借りられなかったり、他の種目も含めて大爆笑の連続でした。また、三世代による家族リレーといった核家族化が進んだ今では、できそうにない種目もありました。昔は、自然な姿で地域づくりができていたように思います。(T.K. おわり) 先月号の「文化財紹介の写真二枚は共に裏焼きでありましたので、おわりました。

### 投稿歓迎

「読者からのたより」欄への投稿を歓迎します。本誌を読んだの御感想、御意見等をごとしくお寄せください。  
●投稿規定  
①一件につき四〇〇字以内 ②住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記(誌上匿名可) ③掲載分には薄謝進呈  
※文章を一部手直しさせていただくことがあります。  
●送り先  
〒100 東京都千代田区霞が関三二二二  
文部省大臣官房政策課「文部時報」編集部

MESSC. 61 月刊

文部時報 11月号

第1427号

●著作権所有——文部省◎

●発行所——株式会社 きょうせい

本社 〒104 東京都中央区銀座7丁目4番12号  
本部 〒167-88 東京都杉並区荻窪4-30-16  
電話 03-5349-6666(営業部) 振替口座 00190-0-161

●印刷所——株式会社行政学会印刷所

平成7年11月10日印刷  
平成7年11月10日発行

定価550円(本体534円)(〒84円)  
年間購読料6,600円

・ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し付けます。  
・なお、購読のお申し込みは直接営業所またはほとりの書店にてお願いします。

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、それぞれ筆者個人の見解であることをお断りいたします。

Printed in Japan 1995 ISSN 0916-9830 ●この刊行物は再生紙を使用しています。